

相手が分かるように伝わるには

ウォン・ロチャン

ただいま、私が手話で皆さんにあいさつをしました。「こんにちは」という手話でした。今年5月から、北区障害者福祉センターで手話講習会に参加しはじめました。今、半年が経ちました。初級のレベルで、週1回です。講習会の先生は耳が聞こえない人と聞こえる人が二人ずついます。私が日本で手話を習う理由は聴覚障害者とコミュニケーションを取りたかったからです。母国の香港でも手話を習っていましたが、国や民族ごとにことばが異なるため、あらためて日本の手話を習いたかったからです。

香港で手話を習っていたときは、先生が言葉の表し方を一方的に教えていただけでしたので、それを覚えれば、絶対に耳が聞こえない人と話せるとずっと思っていました。しかし、日本の手話の先生と出会ってから、手話に対する考え方が変わってきました。手話で話す一番重要なポイントは「伝える」と「伝わる」の意味を理解して区別しなければならないことです。

「伝える」と言うのは話し手が言葉を一方通行で言うことです。実際に、相手が話を分かるかどうかは関係なく、話し手の言いたいことをそのまま言えばそれで十分です。一方、「伝わる」というのは相手に分かるように工夫をすることです。そこで、伝わるポイントが必要になります。それは手振りや身振り、顔の表情などといった非言語コミュニケーションを加えながら表すことがとても大事です。

そのことは、手話だけでなく、私が日本語を話すことも同じであることに気がつきました。私は日本に来て、日本語の壁で何度も誤解を生じたことがあります。そして、日本語を間違えて周りに笑われることが心配で、自分から声をかけることが怖かったです。アルバイトでも日本語の対応が難しくてやめてしまいました。それに、手話講習会の40人の中で、外国人は私一人でした。日本人学生とグループ発表の機会がありました。私は日本語をうまく伝えられなかったり、聞き取れなかったりすることで皆と通じあえないときがありました。最初、日本語で話す私ははずかしくてじっとしていましたが、徐々にほかの学生が気づいて声をかけてくれたり、私が聞き取れなかった部分をまとめて説明してくれたりしていました。さらに、耳が聞こえない先生も一生懸命に皆が見て分かるようにホワイトボードで絵を描きながら、顔の表情で表しながら説明してくれていました。そうすると、学生の私たちは理解できない手話もあっという間に分かってしまいました。相手に言葉が伝わる工夫をする大切さを実感できました。この体験を通して、手話の勉強も日本語を話すことも「伝わるポイント」は同じだという事に気付きました。

これからも、手話であろうと、日本語であろうと、相手が分かるように伝わるポイントを毎日心がけたいと思います。みなさんもぜひ、手話でも日本語でも私と話し合ってください。ありがとうございました。